

マガダン州概要



悲哀の仮面

2018年2月
在ウラジオストク総領事館

目次

1	位置	2
2	気候	2
3	沿革	2
4	人口・住民	2
5	政治	2
6	経済・産業	3
7	治安情勢	4
8	日本との関係	5

マガダン州概観

1 位置

- (1) マガダン州はロシア極東の北部に位置し、北部でチュコト自治管区及びカムチャツカ地方と、南部でハバロフスク地方と、西部でサハ共和国と境を接し、東部はオホーツク海に面している。州都マガダン市はオホーツク海に面した良港である。
- (2) 面積は46万1,400平方km（日本の1.24倍、ロシア連邦構成主体の中で第9位）。
- (3) 日本との時差は、マガダン州が日本より1時間進んでいる。

2 気候

マガダン州はツンドラ気候帯に属し、州の半分は永久凍土に覆われている。夏と冬の寒暖差が激しく、夏季の気温は30℃まで達することもあるが、1年のうち6～7.5ヶ月を占める冬季には州中心部では-40℃～-50℃まで下がり、厳しい寒さとなる（年平均気温は-2.7℃）。冬季は陸路での物資輸送が困難となるため、夏の間燃料・日用品・食料品等を輸送して冬に備える「北方輸送」の対象地域となっている。オホーツク海に面したマガダン市は州内でも相対的に温暖な地域であるが、沿岸部は濃霧や長雨に見舞われることが多い。

3 沿革

- (1) 20世紀初頭、コルィマー川流域で砂金が発見されて以降、同地域へのロシア人の入植と金の採掘が本格化した。1928年にはナガエヴォ港（後のマガダン村、1939年にマガダン市に昇格）が建設され、採金業の根拠地として発展した。
- (2) 1931年、極東北部の開発を進めるため、マガダンに本部を置く「ダリストロイ（極東建設総局）」が設置された。その労働力として、政治犯を含む多数の囚人がマガダン経由で内陸部のコルィマー流域を中心として設置された強制収容所（「グラーグ」）に組織的に送り込まれた。過酷な気候条件に加え、非人間的な強制労働システム「グラーグ」により膨大な数の人命が失われ、「コルィマー」の地名は旧ソ連全土でも最悪の「グラーグ」として今日なお人々に恐怖を呼び起こすものがある。「ダリストロイ」による開発は1954年まで続けられた。
- (3) 1953年12月、マガダン州が設置された。

4 人口・住民

- (1) 人口は14万5,546人（2017年1月）で、その半分以上の9万9,681人（2017年1月）が州都マガダン市に集中しており、州全体に広大な無人地帯が広がっている。人口は1989年の39万人をピークに激減している。
- (2) 人口の75%はロシア人で、その他ウクライナ人、タタール人、ベラルーシ人やエヴェン人、コリヤーク人等の北方諸民族も含む105の民族が居住している。

5 政治

- (1) 2013年9月に知事選挙が実施され、ペチョーヌイ州知事代行が再選された。

(2) 2015年9月に実施されたマガダン州議会選挙での比例区選出議員は11名(「統一ロシア」7名(57.71%),「公正ロシア」2名(13.54%),「共産党」1名(11.44%),「自由民主党」1名(9.95%),括弧内は各党得票率)。小選挙区選出議員10名。議長はアブラモフ議員(「統一ロシア」)。

(3) 2016年9月に実施された国家院選挙の各党得票率は、統一ロシア45%、ロシア自民党20%、ロシア共産党15.5%。投票率は40%。

(4) マガダン市については、2013年6月より市長を務めていたアブラモフ氏は、2015年9月に任期満了により退職。2015年11月、グリシャン第一副市長が市長となり、現在(2018年2月)も同人が市長を務める。市議会は議員定数23、任期5年。

6 経済・産業 (経済指標の出典：連邦統計局ハバロフスク支部資料)

(1) 経済状況・産業構造

(ア) マガダン州の主な経済産業は鉱業及び発電業であり、これらの分野がマガダン州の年間生産高の95%、投資の67%を占めており、2017年11月現在、労働力人口の23%が同分野に従事している。マガダン州はソ連時代から金及び銀の生産の中心地で、ソ連解体後の経済混乱で生産量は一時落ち込んだものの、その後米国やカナダ、アイルランド及び中国からの外資導入を図り、1997年にクバカ金鉱やシコリノエ金鉱、ドウジュリエッタ金鉱等の生産が始まった結果、ソ連解体前の水準を回復し、2016年の金の生産は対前年比+10.1%であった(※公式統計は出ていないが2016年の金の生産量は約28トンと過去最高を記録)。他方、近年、銀の生産量が伸びており、引き続き銀の精錬量が飛躍的に伸びることが期待されていたが、2016年は対前年比-15.8%と停滞した。現在ヤノ・コリムスキー地区、南アモロンスキー地区、シャマニホ・ストルボフスキー鉱床及びオロエクスキー鉱床地区の開発が進められている他、2016年9月にウラジオストクで開催された第2回東方経済フォーラムにおいて、極東発展省とマガダン州の「ポリュス」社が、ナタルキンスキー金鉱をベースとする鉱物採掘・加工会社の設立協定に署名した。

(イ) 鉱業に次ぐ主要産業は発電業である。現在マガダン州では水力発電、火力発電等によるエネルギー供給が行われている。ただし、マガダン州の発電産業はロシア統一エネルギーシステム(ロシアの電力独占会社)のネットワークから独立しているため、余剰電力を地方に送電できない。

(ウ) 漁業・水産加工業も盛んであり、スケトウダラ、ニシン、マダラ、オヒョウ、コマイ、カレイ、サケ、イカ、カニ、ツブ貝を中心にロシア国内市場だけではなく米国、中国、日本、韓国へも輸出している。2009-2014年の間に漁船の近代化及び水産加工工場の建築・改装プロジェクトに9億4896万ルーブルが支出された。近く漁港の近代化及び漁業ターミナルの復旧作業が行われる予定。

(エ) マガダン州と他の地域を結ぶ手段として、自動車道、港湾及び空港が整備されているが、鉄道はない。海運は発達しており、同州の貨物99%が海路で運ばれている。またマガダン市から56kmに位置するマガダン国際空港はロシアの他地域、CIS諸国を含む外国とマガダン州を結んでいる。

(オ) 有望な開発プロジェクトとしては、北オホーツク海域のマガダン沖大陸棚の石油・天然ガス開発プロジェクト(マガダンI、II)がある。また、2013年6月、川崎重工、ルスギドロ、RAO エネルギーシステム・ヴォストークの間で、液化水素生産プロジェクトに関する合意文書が署名されたが、その後進んでいない模様。

(カ) マガダン州で初となる先行発展領域 (TOR) 「オムスクチャンスキー石炭クラスター」を創設する計画があるが、投資家を探している状況。

(2) 特別経済区

2014年に連邦法「『マガダン州における特別経済区に関する連邦法』の変更」が施行され、経済特区制度の有効期間が2025年まで延期された。極東全体の開発、マガダン州への投資誘致及び同州での新たな産業作りを目的としており、右域内に本社を置く法人に対し法人税や関税面での優遇措置が与えられる。現在進行中のプロジェクトとして、巨大スキー場を含むスポーツ・観光コンプレックス「太陽のマガダン」の建設が挙げられ、同コンプレックスでは、スキー場、商業センター、客室数300室のホテル、屋内駐車場、展望台、レストラン、娯楽施設等が建設される予定。

(3) 貿易

2016年のマガダン州の貿易高は4億7,390万ドル (2015年3億8,627万ドル) と、対前年比で23%増加し、輸出が4億1,580万ドル (前年比26%増)、輸入が5,810万ドル (前年比5%増) と輸出の伸びが目立つ傾向にある。主な輸出商品は伝統的に魚・海産物で、同州の輸出高の17%を占めているが、近年鉱石・スラグ類の輸出が急増している。主な輸入品は自動車・輸送用機械で輸入全体の約44%を占めている。主な貿易相手国は日本 (輸出: 1億520万ドル, 輸入: 304万ドル)、韓国 (輸出: 6,060万ドル, 輸入: 1,204万ドル)、中国 (輸出: 1,211万ドル, 輸入: 2,414万ドル)、カザフスタン (輸出: 1億8,707万ドル, 輸入: 4千ドル) である。

(4) 経済発展水準・国民生活水準

(ア) マガダン州は金採掘などの鉱業により連邦構成主体の中で賃金水準の高い地域である。近年域内総生産は順調に増加。2016年の平均賃金は6万9769ルーブルであった。

<マガダン州の域内総生産>

2012	2013	2014	2015
784.2 億ルーブル	889.1 億ルーブル 成長率(11.3%)	969.4 億ルーブル 成長率(9.0%)	1246.0 億ルーブル 成長率(28.5%)

(イ) 現在、同州を悩ませている最大の問題は人口流出である。ソ連時代、中央から遠く離れ、自然・気候条件が過酷であることから同州では賃金等の特典を与えることにより労働力を確保し、人口増加を図ってきた。ソ連解体後、そうした特典は有名無実化したため、人口流出が続いている。

7 治安情勢

マガダン州における犯罪認知件数 (2017年11月末時点) は2590件となっており、昨年同時期比で6.2%減少しているほか、過去3年間の認知件数を見ても減少傾向にある (2015年3309件, 2016年2986件)。また、人口1万当たりの犯罪発生件数を見ても人口動態も減少傾向にあることから昨年比13%の減少を示している。昨年11月時点での犯罪認知件数の内訳は強盗や自動車盗等の窃盗罪が全犯罪の約3割を占めているほか、薬物犯罪や森林の違法伐採や水産物の違法漁獲等の経済犯罪がそれぞれ全体の1割 (薬物犯罪328件, 経済犯罪220件) を占めている。

近年マガダン州では中央アジアや朝鮮半島からの外国人労働者の流入が増えており、様々な人種、民族が暮らしており、概して対日感情は良好であるが、「日本人は金を持っている」

という思いこみもままあることから強盗や窃盗等の財産犯罪に遭遇する危険性は排除されず常に注意が必要である。

8 日本との関係

(1) 日本企業

日本企業では水産関係企業や建機メーカーがマガダン州内で活動しており、特別経済区制度の枠組みで、2016年12月にコマツがりマンセンター（注：鉱山建設機械を分解・清掃・再組み立てする施設）を設立した。また、マガダン州は比較的富裕層が多いことから、ソニー社が自社製品の展示・販売を行う「ソニーセンター」をマガダン市に構えている。

(2) 文化

2009年7月、マガダン市70周年祭とタイアップする形で映画館「ゴルニャーク（鉱夫）」（元々日本人抑留者が建設したもの）にて日本映画祭を開催、日本映画4本を上映（同州奥地（マガダン北方約500km）のヤーゴドノエにおいても特別上映）。

2010年7月、マガダン日本文化デイズを開催、日本アニメ上映会（同州の地方都市であるウスチ・オムチェクでも上映）、着物着付講習会、ミニ日本展示会、日本に関するプレゼンテーションを実施。

2011年9月及び2013年8月、2015年9月、2016年10月に日本映画祭を開催。

(3) 日本語教育

日本語の専門教育は北東国立大学及び第24番ギムナジウムにて行われている。日露青年交流事業において、北東国立大学から毎年若干名が日本を訪問し、日本の大学生と交流を行っている。

(4) 自治体交流

マガダン市は日本との姉妹提携に関心を有しているが、実現していない。

(5) 日本人墓地

(ア) 第二次世界大戦終了後、ソ連により抑留された旧日本軍人等のうち3000人以上がマガダン周辺の収容所に送られ木材伐採や建設作業等の労役に従事した。

(イ) 1992年、抑留者埋葬地2カ所（うち1カ所はマガダン市内の「使徒降臨教会」敷地内）で厚生労働省による遺骨収集が行われ49柱が収集された。この他、マガダン中央バスターミナルから約4キロ離れた海岸の工場敷地内にも埋葬地が存在するとされる。

(6) その他

1939年12月、マガダンからウラジオストクに向かっていたソ連輸送船インディギルカ号が北海道宗谷岬付近で座礁沈没しマガダンの漁業労働者や移送中の囚人など約700人が犠牲となったが、現場近くの猿払村では官民一体となって救助にあたり暴風雪の中で約400人を救出した。現在、猿払村の海岸には慰霊碑が建てられている。

(了)